突っ込む彼女ら、弾ける彼ら。

りーぬ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

花咲川学園に入学した美浜慶、奥沢美咲、弦巻こころとその周囲が過ごす日々。

「苦労人の奥沢さんとぶっ飛びガールの弦巻さんの中間を往く俺がねえ」
「いや、美浜くんもこころ側だからね」
「美咲もよ！みんなで世界の笑顔のために頑張りましょう！」
「あ、奥沢さん今日もかわいいね」
「はいはいそうですねー」
「慶、私はどうかしら？」

「笑顔が素敵だね」
「最高の褒め言葉よ！」
「いやこころちょろくない？心配なんだけど」

「ねえ美浜氏、僕の出番は？」
「ないらしい」

こんな感じの日常が続いていくんだと思ってくれたら…いいな。とまあ、そういうわけで…
美咲・慶「突っ込む彼女らと」
こころ・慶「弾ける彼ら」

三人『始まるよ～!!!!』

目次

1話　始まりのブラウン ―――― 1
2話　セクハラは犯罪です ―――― 8
3話　マイ・フェア・トレード ―― 16
4話　イッツ・ア・弦巻ワールド 26

1話　始まりのブラウン

「いっけな～い、遅刻遅刻！」

俺は美浜慶（みはまけい）、花も恥じらう花咲川学園一年生！トーストを口に咥えながら家を飛び出し、絶賛ダッシュ中!!

――同じ学校の制服を着た生徒が歩いてるけど、こんな遅刻魔だらけの学校で大丈夫なのかな？

「うっ…ハァ、ハァ…ヤッバめっちゃ疲れた」

全力で走り続けて脚が完全に使い物にならなくなり、肩で息をしながら校門をくぐる。どんなもんだ、余裕だろ…とスマホを開けば、そこに表示されたのは…

『午前七時三十分』

「一時間くらい間違えた…???」

これは初日からアホの子みたいになってしまった、そんな俺の物語。

「それじゃあまずは順番に自己紹介をよろしく」

教室についてぼーっとしてたらホームルームが始まった。いやもうなんか周りのことに注意が向かないくらい疲れてた。マジで。

それで、今から自己紹介の内容を考え始める。何言えばいいんだろう。

「はーい！あたしの名前は弦巻こころよ！みんなが笑顔で過ごせるといいと思うわ！これからよろしくね！」

ずっと考えてたらデカい声が聞こえてきて強制的にそっちに意識が向く。めちゃくちゃ元気な子もいたもんだな。おかげで何言おうとしたか忘れちゃったじゃないか…俺の番までだいぶ少なくなってきたしもう適当でいいか！うん！

「美浜慶っス！苗字だけ見ると女っぽいけどそんなことはない！趣味はなし特技もなし！あるのは食欲と睡眠欲！よろしく！」

弦巻さんに負けじとどデカい声で自己紹介をして俺の紹介は終わる。これはシンプルかつ好印象なんじゃないか？ん？性欲？人並みです。

紹介が終わってクラスを見回してみると、女子が多いの何の。え、男子いなくない？本気か？

「ねぇねぇ根倉くん。ウチのクラス男子少なくね？」

「うん…元々女子校だし。まだ男子の受け入れは試験段階らしいよ」

目の前の席に座るちょっとオタクっぽい男の子、根倉琢（ねくらたく）くんに聞いたらそんな事情があったらしい。何かテキトーに受験した俺が知るわけないか！はっはっは！

「そうなんだ～。あのさ、ウチのクラスの男子少ないし、俺で良かったら仲良くしてくれない？席近いのと、同じ男子のよしみでさ」

「いいよ～。僕オタクで陰キャだけど仲良くしてね」

「何だよその自己紹介！あんまり気にしなくていいよ、俺もアニメ見たりゲームしたり、たまにはするしさ」

根倉くんと何やかんやで仲良くなったら、俺にオタク文化を植え付けるために色々布教してくれるんだって！根倉くんの影響で俺もオタクになるのかもな～。

「あっやばい。トイレ行きたい」

「美浜氏早く行かないと始業式始まっちゃうよ」

「いや～これが突然大の方が来そうなんだよ。みんなが動きだしたら先行ってて！」

根倉くんにそう言って俺はトイレへ一目散に駆け出した。急に便意来るのやめてくれよぉ…俺のお腹どうなってるんだよ…

さっさと用を足して手を洗い、教室へ戻ると人っ子一人いない。もうみんなまとまって移動したのかなぁ。

「俺も急ご…ん、まだいたの？」

俺が入ったドアと逆のドアのすぐそこに生徒がいたのに、すぐには気づけなかった。何だか普通で、本当に特別なことがないような人っぽい。無難を体現した、そんな感じ。

悪口じゃないぞ!!

「え?あ、キミは…元気な自己紹介の人」

確か美浜くんだっけ、と言うその子にイエス、と返す。さあここからが問題だ。

「キミは?ごめん、俺自己紹介考えるのに夢中で聞いてなくてさ。あっはっは」

「奥沢美咲。大丈夫、内容はともかく印象には残ったから」

「あ〜ありがとう。でさ、もうみんな移動しちゃったみたいだし一緒に行かない?」

「そうだね。行こうか」

奥沢さんと二人、少し早足で廊下を歩く。

せっかくだし仲良くなりたいなぁ。それなら何かしら話題振らないとね。

「奥沢さんもうんこしてたの?」

「は?」

奥沢さんから冷たい視線が向けられる。何でだよ。

「いやぁ俺も急に出そうになってトイレ駆け込んでさ。戻ってきたら奥沢さんしかいなくて」

「美浜くん、ちょーーーっと話の振り方考えようねー？女の子にそういうこと聞くのはNGなんだよー？」

「え何で？奥沢さんもうんこくらいするでしょ？」

「え、ねえちょっと殴っていい？これは許されるよね？」

「初対面のクラスメイトを殴る奥沢さんもどうかと思うよ!?」

初日の収穫は根暗くんという友達ができたことと、奥沢さんに敵視されたということくらいだったかな。うん。初日からやらかした感すごいわ…

2話　セクハラは犯罪です

始業式の次の日、今日こそはバカみたいなミスはせず至って普通に登校する。これが普通なんだよなぁ～…

「美浜氏おはよう」
「おっ根暗くんおはよう」

早速友達っぽいやりとりが自然とできていて何か嬉しさを感じるな。友達がいなかったわけじゃないけど、新しい環境になればこういう体験に改めて感動できる。
そして同じ1―Cの下駄箱で靴を履き変えようとすると、見覚えのある姿が。その女の子は…

「奥沢さん。おはよ～」

昨日汚物の話をしながら始業式へ共に向かった奥沢さんだった。

「…うわ、美浜くん。おはよう」

ねえ今『うわ』って言ったよねこの子。

「そんな反応しないでよ。可愛い顔が台無しだよ？」
「煽ててるつもりなの…？キミ、デリカシーって知ってる？」
「何それ。リテラシーの仲間？」
「ああうんそんな感じ。昨日の発言は反省してくださいねー」
「わかった！じゃ改めてよろしく」
「はぁ…何でこうなるかな」

奥沢さんはやれやれと溜め息をつきながら、俺はニコニコしながら握手を交わす。何この子ツンデレなの？それともこういうのを断れないタイプ？

「美浜氏、昨日一日でよくそんな印象悪くできるね」

「いや～それほどでも」
「褒めてないよ」
「うんこして帰ってきたら奥沢さんが教室にいたからさ。奥沢さんもうんこ？って聞いたら拗ねちゃって」
「あのさ、やっぱさっきの握手取り消させて」
「それは美浜氏が悪いね」
「何で!?」

仲直り出来たと思ったらクーリングオフを希望されたりとたった二日で関係が二転三転するのも変な話だよ。結局三人で教室まで行ったんだけどね！
そんなこんなで教室の扉を開けると、

「みんなー！一緒に歌いましょう！」

何か単独ライブが始まってた。

「入る教室間違えたな」

「いや美浜氏合ってるよ」
「だって何か歌うらしいよ今から」
「弦巻こころでしょ。ぶっ飛んでるって早くも噂じゃん」
「マジ？常識ないのかな」
「それ美浜くんにも聞きたいよ…」

取り敢えずもう一度扉を開けると、困惑した表情のクラスメイト達と、教壇で側転したりしながら歌い出した弦巻こころがいた。…うん、やっぱり何かの間違いだよな。

「あら？あなたは慶じゃない！昨日の自己紹介元気があって素晴らしかったわ！」
「え？あぁ…どうも。ハハハ」

ヤバい。ぶっ飛びガール弦巻さんに既に標的にされていたなんて…自己紹介なんて無難に済ませるべきだったか。今は奥沢さんが羨ましいぜ…

「美浜氏、がんばってね」

根倉くん…裏切るのか…!?

「さぁ慶、一緒に歌いましょう!花咲川のみんなを笑顔にするわよ!」
「え、勘弁してくれませんかね…」

昨日の段階では奥沢さんくらいしか俺に悪印象を抱かれていなかったのになぁ。結局弦巻さんに朝から振り回されたせいで完全にクラスメイトのほとんどに誤解された気がする。

「俺音痴だから」
「美浜氏歌下手だね」
「結構気にしてるんだよね…」

そして音痴が歌を披露してさらに評価を下げていく。転校したくなるんですがそれは…

オリエンテーションだらけの午前中を失意のままに過ごし、今は昼休み。時間が進むのが早い?気のせいだよ。

「ねえねえ奥沢さん一緒にお昼食べない？」
「えっと…ええ…」
「いいじゃん昨日スタートダッシュミスった組で仲良くしよう？」
「それ僕も入ってるの？」

友達の少ない俺は根倉くんと共に奥沢さんをお昼ご飯に誘いに来ていた。弦巻さん？いやほんと知らない子ですね…

「まあ…いいけど」
「じゃあこっち来てよ！根倉くんと俺の机くっつけるから」

近くにあった椅子を拝借して三人目の席を用意する。何かめっちゃ青春してて草。

「あ、ねえめっちゃどうでもいいんだけどさ」
「ん？」
「弦巻さんって胸大きくない？」

「あたし戻っていいかな」

いや～無理やり歌わされる時にちょっと気づいちゃったんだよね～。

「アレで側転とかバク転とかしてるんでしょ？揺れとかやばくないのかなって」
「あんたほんと馬鹿なの？馬鹿なんですよね？」
「さすがに奥沢氏に同情するよ」

男の俺には無縁な話だけど見ている側としては話が別だからな～。その辺気にした方がいいと思う、しかもスカートだし。

「ほんと何で早々こんな奴に捕まって…しかも変態だなんて」
「いやぁ、ははは。でも奥沢さんはいいよね」
「ん？何が？」
「弦巻さんほど揺れる胸なくて」
「眼球刺し箸してあげようか？」
「奥沢氏、ちょっとそれは目の前でやらないでほしい」

いや根倉くん眼球刺し箸自体は暗に認可してるのやめてよ冗談キツイなぁ。…え、冗談、だよね？

「え何であたしここにいるの？根倉くんこれやばくない？セクハラだよね？」

「美浜氏が悪いと思う」

「どうもすみませんでした!!ご飯食べましょう!!」

奥沢さんのダークオーラが半端ないことになってたから余計なことを言わないようにお昼ご飯を食べる。

『セクハラだよね？』って根倉くんに聞いた時の奥沢さんの顔がマジで能面みたいな表情で怖かったから…昼休みが終わるまで本当に震えが止まらなかった。今度山吹ベーカリーのパンを奢るってことで手を打ってもらうことになりましたとさ…

3話　マイ・フェア・トレード

今日も今日とてランチタイム。

「奥沢さん最近弦巻さんとつるんでるよね」

「成り行きでね…ははは」

高校生活が始まって随分経ったけど、相変わらず俺は根倉くんか奥沢さんといることが多い。

弦巻さんにも絡まれるけど、何よりも最近は奥沢さんと弦巻さんが（頭が）ハッピーセット的な感じでいるのが気になる。

「奥沢さんもああいうキャラ目指してるの？」

「んなわけないでしょ」

ちなみに根倉くんは委員会で出払ってる。ご飯もそっちで食べるらしい。

「まあ…仕方なく、ね」
「…ツンデレなの？」
「美浜くん、君の目おかしいんじゃないの？ほんとに神経つながってる？」

何でこの人こんなに俺に対して辛辣なの？

「あー…でもまあ美浜くんとは何だかんだやってきてるし言ってもいいかな」
「ん、何？告白？」
「その自信はどこから来るの？」
「全身から溢れ出てるよね、ハハハ」
「何笑ってんの？」

やっぱり当たり強くない？俺そんな嫌われることした覚えないんだけど？

「いやー…あたしね、こころと同じバンドに成り行きで入ってさ」
「へー。ヤバそう」

ヤバそう以外の感想なくない？弦巻さんと一緒とか絶対破天荒でしょ。…え、待って。

「…奥沢さんバンドやるの？」
「あー…うん、そういうことだね」
「なるほど」

奥沢さんがギター弾いてるところを想像してみた。
あの奥沢さんがクレイジーな髪の毛を振り回しながらギターをガシガシ演奏して挙句の果てに『Ｆｘｘｋｉｎ，　ｓｈｉｔ!!』とか観客に向かって中指を立てると…

「奥沢さんヘビメタ案外いけるんじゃない？」
「あんたが何想像してんのか大体わかったけど全然違う」

メイクすれば絶対いけるって。俺が保証するよ。

「あたしＤＪなんだよねー…しかもクマの着ぐるみ着てさ。ミッシェルっていうんだ」

「…奥沢さん。熱でもあるの？」

「まあそうなりますよねー」

キグルミを着てそれに名前がついてて、そのミッシェルって名前でＤＪをする奥沢さんが、弦巻さんと同じバンドのメンバー…

「ｗｗｗ」

「美浜くん、君しばくよ？」

まあまあいいじゃん、奥沢さんにも非日常的な高校生ライフが到来して。思ったより充実してるかもだしさ。

「ライブとかするの？」

「組んだからにはするでしょ」

「あ、じゃあ俺行くわ。ファン1号になってあげる」
「マジで言ってるの？知り合いにはあんまり来てほしくないけど…まあ決まったらまた言うよ」

やっぱりこの子ツンデレ説ありますよね？バンドだってぶつくさ言いながら楽しみ始めるんだよどうせ。いいことじゃないの。

「おっけーよろしく。メンバーって集まってるの？」
「まあね。別のクラスの北沢はぐみって子と、ウチの2年の松原花音さん。あとの1人は羽丘の2年の瀬田薫さんって人」
「意外と身近な人が集まるもんなんだ」
「まともなのは花音さんくらいだけどね」

遠い目をして語る奥沢さん、苦労してるんだなぁ。そのうちストレスとか疲労とかで倒れないか心配だ。

「ガールズバンドなんだ」

「そうなるね。薫さんに関しては男子顔負けだけど」
「ふーん。俺とどっちがかっこいい？」
「薫さん」
「即答で草」

事実だとしても心が痛むよ。
いやまあイケメンではない自覚あるから、薫さんって人が美形なら勝てないと思う。

「美浜くんも悪くはないと思うよ」
「ん？これはワンチャンあるのか？」
「ないから安心して」

奥沢さん、ツンなのかデレなのかはっきりしてほしい。俺の心の浮き沈みに直結してるんだよ。

「まあでもほら、前も言ったけどデリカシーないじゃん？」
「そうかな？ｗ」

「そうだって言ってんじゃん」

まずい。この話になると必ず奥沢さんの周りの温度が5℃下がる。ゲ〇ガーかよ。

「そういうのあたしとしては超マイナスポイントだし。そういうのが好きな女子と仲良くなれるといいね」

「マイナスって割にはよく一緒にいるよね」

「誰のせいかわかる？」

全然分からない。友達が少ないとか、他の子より俺の方が仲がいいからとかそういう理由じゃないの？

「君の発言によってあたしも同じ人種だと思われてるの。自重して」

「よくわかんないけど了解」

周りからの奥沢さんの評価が下がることは何もしてないはずなんだけどなぁ。

「あ、どうでもいいけどその卵焼きもらうね」
「え!?ちょっ」
「うんま！これ誰が作ったの？」
「あんたねえ…」
「へ？」
「はぁ…いやもう何でもない、怒るのもだるい」

その割には不機嫌な顔と盛大な溜め息なんですが…

「ごめんて。美味しそうでっい」
「せめて許可はとってよね」
「くれるか分からない許可を？」
「だからって勝手にとるな」

大変申し訳ございません。

「ん～じゃあ俺の唐揚げあげるから。昨日の夕飯の残り物だけど」

「仕方ないな…じゃ、もらっとこうかな」
「はい、あーん」

母さんお手製の超美味！唐揚げ半ピースを箸で挟んで奥沢さんに近づける。対する奥沢さんはというと…

「いやいやいやいやいいから！自分で食べれるし！」
「まあまあそんなこと言わずにさ。ほら」
「嫌！絶対に！」
「え～美味しいのに。要らないの？じゃあ俺食べちゃうよ？」
「ぐっ…」

卵焼きを取られたことへの対価、そして肉という食におけるトップクラスの誘惑にはさすがの奥沢さんも負けそうな様子。

「あーもう…今日だけだから…！」

これまたツンデレの常套句を吐きながら箸に顔を近づけ、唐揚げを猛スピードで奪い去った。周囲からは歓声が聞こえる。

「違うから！あたしの意思じゃないから！」

嘘は良くない。

「奥沢さんだいた～ん」
「ほんとに違うから！」
「奥沢さん、元気出そうよ」
「あんたのせいでしょ！あたしもう学校嫌!!」

でも唐揚げは美味しかった、と一言残して教室を走り去っていった。根倉くんの机にお弁当箱を置いたまま。

4話　イッツ・ア・弦巻ワールド

「はわ…ねむ」
「あら、慶！おはよう!!」
「おはよう弦巻さん、朝から元気だね」
「もちろんよ！でも慶は元気がなさそうね？大丈夫！私が笑顔にしてあげるわ！」
「いやいやめっちゃ元気だから！あ～朝から弦巻さんの元気な姿が見れていい気分だな！」

いつものように適当な時間に登校すると、まあ朝っぱらから活力に溢れた弦巻さんに挨拶される。
初日の勢いのせいで俺は弦巻さんに『同類』だと思われてるらしい。

「それならよかったわ！それじゃあ一緒に踊りましょう！」

え、何で？

「弦巻さんちょっと待って振り回さないでああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

教室前方、教卓の横のスペースでグルグルと回転させられる俺。

モーニングにイートしたフードをクラスルームにバーストしてしまいそうだ。いや勢いつけすぎなんだよね弦巻さん…！

そんな文句を言う間もなく、クラスメイトに奇異の目で見られながら絶叫し何回転かした後、俺は解放された。

「うえぇ…マジで無理…」

胃の中がシェイクされて本当に気持ち悪い…目も回るし。さすがは花咲川の異空間。

「美浜氏」
「う…どうしたの根倉くん。できれば少しそっとしといてくれると助かるな…」
「やばかったらトイレ行ってね」
「心配するのそこ？」

友達にも見限られました。
まあ…うん、無理に動いちゃったしこれは仕方ないよね。お昼までは授業も出席だけして休ませてもらおうかな。

数学。
「このAとBの座標を…じゃあ美浜くん」
「気持ち、悪い。吐き、そう」
「数値でお願いしてもいい？」

古典。
「美浜、助動詞まじの活用を言ってみろ」
「まじつらまじ無理まじ死ぬ」

「何言ってるんだ」

英語

「今からこのページをペアで交互に読んでください」

「Ｈｅ　ｓｅｅｍｓ…　ｌｉｋｅｌｙ　ｔｏ…　ｖｏｍｉｔ（ガタッ）」

「先生美浜氏が吐きそうなのでトイレに行きました」

何で今日という今日に限って集中攻撃されてるの？というかこんないじめっぽいことするなんて、教師としてあってはならないよね？

ふう…何があったかは言わないけど、つっかえてたものがとれたようにスッキリした。排出行為って偉大だな。

「美咲ー！一緒にお昼を食べましょう！」

「だーもうわかったから落ち着いて」

トイレにそこそこ長居をしてしまったからか午前の授業は終わっており、教室に戻れば弦巻さんが奥沢さんに熱烈ラブコールを送っているところだった。

「仲良いんだね」
「そういうのじゃないから。というか体調大丈夫なの？」
「あ、うん。ゲロ吐いたら楽になったよ」
「これから食事する人にそういうこと言わないでくれる？」
「あはは、ごめん。気分楽になったのが嬉しくて」

弦巻さんについてそうは言うけど満更でもなさそうな奥沢さん。割と相性いいんじゃないの。

「慶！もう元気になったかしら？」
「うん、もう大丈夫」
「それならよかったわ！」

うん、原因が君にあるとは言わないでおこう。この笑顔をぶち壊しにしたら後が怖い

気がする。

「ねえ慶、あなたも一緒にお昼を食べない？みんなで食べた方が美味しいと思うの！」

弦巻さんお得意の超理論かと思ったけど言われてみれば一理ある気もする。世の中には『一人がいい』って人も多いんだろうけど、俺は人と話したりするのは好きだな。

吐いたばかりでご飯が食べられるかと言われれば微妙だけど、ここで食べないと今度はエネルギーが足りなくなる気がするから食べるしかない。

「いいよ。そういえば根倉くんは？」
「委員会だって。寂しいの？」
「べつ、別に寂しくなんかないんだからねっ！」
「似合わないからやめときな？」
「これ奥沢さんの真似だけど」
「ねえこころ、やっぱりこの人と食べるの嫌なんだけど」
「美咲も楽しそうで何よりだわ！」
「あーだめだ話が通じない」

加勢無しと踏んだのか机に突っ伏してしまう奥沢さん。本当に脱力してる感じが出てるのがちょっとかわいい。

弦巻さんが楽しそうって言うってことはやっぱり奥沢さんも満更でもないのかな。

どうでもいいけど根倉くんの登場回数、友達の割に少ない気がする。

「もう勝手にお弁当取らないでよ」

以前の件が効いているのか、ジト目で奥沢さんが警告してくる。…待てよ、奥沢さんは何やかんやツンデレみたいなところがある。これはフリか？フリなのか？

「それじゃ食べましょう！」

「「いただきます！」」

みんなでお決まりの挨拶をしたところで弁当箱を開ける。今日の弁当は…

「おお、シャケ弁」

超絶質素に焼き鮭が1切れ、あとは適当にゆで卵とアスパラガスがぶち込まれている。ミニトマトも忘れない。

鮭とか弁当に入ってるの久しぶりな気がする。ミニトマトはともかく冷食が1つも入っていないのヤバい。母さんに感謝だな。

「奥沢さん」

「あげないよ」

「まだ何も言ってないよ!?」

奥沢さんが警戒心の塊すぎる。前科者だから仕方ないのか…

「慶、今度私たちライブに出るのよ!」

「突然だね」

嵐かな?

「ん？奥沢さんから聞いてないんだけど」

約束したんだけどな、と思って奥沢さんを見ると『やられた』と言わんばかりの顔をしている。

「いや、あたし昨日の夜言おうと思ったんだけどさ。美浜くんの連絡先知らなくて言えなかったんだよね」

「そういえば俺たち連絡先持ってないよね。待ってね……はいこれ。弦巻さんもどうぞ」

「ありがとう！」

メッセージアプリのＱＲコードを表示して２人に見せる。俺の友達が２人増えた！やったね！

そして衝撃の事実…クラスメイトの中で連絡先交換してたの根倉くんだけ。悲しすぎない？

「え、ちょっと何泣いてんの…」

「いや俺って友達少ないんだなって」

やばい涙出てきた。話題変えよ。

「で、ライブ出るんだっけ？」
「そうなの！だから慶に来てほしいのよ！」
「へえ、いいね。見に行くよ」
「あー、来月ね。来月の３日。来るなら空けといて」

そして大事な日程を教えてくれない弦巻さんに代わって奥沢さんがフォローを入れてくれた。何やかんやで息合ってるでしょ。

「せっかくだし根倉くんも誘ってみたら？」
「そうするよ」

男２人でガールズバンドを見に行くの、少し恥ずかしいけど友達のバンドだし見たいよね。実は初めてのライブ参戦でもある。

「慶、今日は美咲の家に行きましょう！」

だから嵐かって。

「いいの？じゃあ行く行く」
「待って！私許可してない！」
「今日は練習もないしいいでしょう？」
「いや確かに練習はないけど…！こころだけならまだしも美浜くんは無理！」

弦巻さんはいいのか。一人でもとんでもない人なのに？

「差別？」
「男子を入れるのはちょっと…」
「慶なら大丈夫よ！だから今日一緒に帰りましょう？」
「どこに根拠あったの？」

弦巻さんの特技・超理論についていけない奥沢さん。

「そういうことだから、よろしくね」
「あんたねぇ…いやもういいやどうせ断れないんでしょ知ってる」

折れるの早すぎで草。

「絶対こころの家に行った方がいいのに…」
「それはまた今度にしましょう？今日は美咲の家の気分だわ」

どういう気分なんだろうか。

「俺女子の家とか滅多に入らないから緊張するな～」
「変なことしないでよ。余計なこともしないで」
「俺そんなに信用ない？」
「うん」

俺もう奥沢さんの友達やめる。そもそも友達とすら思われてなさそう。

「じゃあ放課後教室に残ってね。勝手にどこか行ったら知らないから」

「「はーい！」」

というわけで、押したら折れる奥沢さんのお家に行くことになりました。次回は奥沢家で大暴れしたいと思います。（大嘘）